

## 初夏に咲くミズバショウ

僕が大雪山を初めて訪れたのは、22歳の7月でした。関西で生まれ育った僕にとっては、大雪山はまさに外国でした。大阪では既に連日30℃を超えているにも関わらず、ここには多くの雪が残り、まだ芽吹いたばかりの高山植物が咲き乱れ、本当に同じ日本なのかと大きく感動したことをはっきりと覚えています。

夏の大雪山を訪れる多くの登山者にとって、最大の目的は日本一ともいえる高山植物の群落でしょう。大雪山は、低温、多雪、強風など、人間が生きていくには最悪ともいえる自然環境が、逆に多くの高山植物群落をつくる環境を生み出しています。

冬に降る多くの雪は、北海道で生活する人には、何の利益も生み出さない「邪魔者」という思いの人も多いでしょう。しかし山に残る多量の雪が、北海道の植物や動物、また人間の社会生活も潤し、梅雨のない北海道に、かけがえのない水資源を生みだしていることを忘れてはならないと思います。

今年の高原温泉は特に残雪が多く、例年6月に咲くミズバショウも、ようやく7月に入って見ごろと



Nature Column (ネーチャーコラム)  
自然解説員などで活躍する人々をリレーしていきます。

なりました。

ミズバショウは北海道ではごく普通に見られますが、道外では日本海側の多雪地域、ほかにシベリア東部やサハリン、千島列島などで生育し、世界的にはそれほど多くの地域で見られる花ではありません。

現時点では、大雪山ではミズバショウの生育に衰退は見られませんが、今後の気候変動によって乾燥化が進むと、湿地を好むミズバショウは瞬間に減少していくでしょう。大雪山の類まれなる自然環境が生み出した日本一遅いミズバショウ群落を高高原温泉に見に行きませんか？

自然写真家

高原温泉ヒグマ情報センター巡視員 松野智久



高原温泉に咲くミズバショウ



## 本で知るふるさととの山

### 謎の迷宮、羽衣の滝

天人峡の羽衣の滝には大町桂月の有名な漢詩があります。

千丈懸崖雲上達  
懸崖缺處挂飛泉  
相看唯誦青蓮句  
疑是銀河落九天

『桂月全集』を読むと、1行目起句の7文字目が雲上「連」と雲上「達」の二通りが出てきます。雲の上に連なるのか、達するののか。字体が似ているだけではなくどちらでも通りそうな気がします。さて、いったいどちらなの？

2年前、旭川地域フィルム・コミッションがロケーション・ナビゲーターを製作したとき、翻訳した中国人女性が「羽衣の滝の詩は中国の有名な李白のもので、中国では子供でも知っている」と指摘したため、漢詩の部分の掲載を見送った経緯があります。

望廬山瀑布 李白

日照香爐生紫煙  
遙看瀑布掛前川  
飛流直下三千尺  
疑是銀河落九天  
4行めの結句は桂月、李白とも同じ「疑は銀河落九天」です。大きな滝の飛流はまるで高い、高い天から銀河が落ちてくるかのようにだ、こんな感じでしょうか。

桂月の漢詩3行目転句の「青蓮」とは名前以外の呼び方として、「青蓮居士」と号した李白のことです。羽衣の滝を目の前にした桂月は、李白の望廬山瀑布を朗々と吟じたのかもしれない。

東川町史第二巻や1965（昭和40）年発行の『大雪山のあゆみ』には「青蓮」に代えて大詩人の意味がある「謫仙」が使われています。誰が置き換えたのでしょうか？

漢詩が有名だったためか、大町桂月が大正7年に羽衣の滝と名付けたことになっています。『北海道地名大辞典』などにもそう書いてあります。『ふるさと東川』の年表には1918（大正7）年羽衣の滝と命名、1921（大正10）年大町桂月が旭岳登山とあります。登山する3年も前に、行ったことのない滝の名付け親となれるものでしょうか？

手持ちの1917（大正6）年の地図に既に羽衣滝とあります。では、誰が、いつ、羽衣の滝と名付けたのでしょうか？

町史編さん専門員、西原義弘



也 十二時五分親子不知を下りしむ、石ころがる、四十五分最も眺望よき處に休息す、羽衣滝と名をなす



大町桂月日記一

大町桂月の羽衣の滝スケッチ②『桂月全集別巻』（昭和40年興文社内桂月全集刊行会発行625頁）から